巻　頭　言

栽培漁業の半世紀

本県では各地でマダイやヒラメの種苗放流が行われており、小学生による体験放流の講師に招かれることがあります。栽培漁業とは何か、放流する魚が生まれてから家庭の食卓にあがるまでの話をするのですが、子供達は早く魚が見たくて落ち着きません。すると先生から「今日のお話はテストに出るからね！良く聞いておきなさい」と声がかかり、しばらくの間おじさんの話に耳を傾けてくれます。そもそも「栽培漁業」という用語は、昭和30年代後半に水産庁の予算要求にあたり庁内協議で生み出された造語だそうですが、昭和54年から小学校5年生の社会科の教科書に取り上げられ、今ではテスト問題の常連になったようです。

昭和38年に沿岸漁業等振興法が公布され、（社）瀬戸内海栽培漁業協会が誕生してから半世紀が過ぎたことを記念して、平成25年に「栽培漁業のあゆみ50年」という冊子が、（公社）全国豊かな海づくり推進協会より発行されました。その内容は、栽培漁業の発展の歴史を黎明期、発展期、定着期、変革期に分けてふり返るもので、併せて都道府県別の発展史が掲載されています。当時、県庁で栽培漁業を担当していた私は、静岡県分について執筆する機会を得ました。

本県において、栽培漁業は沿岸漁業の重要な振興策として古くから技術開発が行われてきました。昭和34年には、伊豆分場においてアワビの産卵誘発試験が行われ、人工採苗に成功しています。昭和40年には、伊東分場でキンメダイの人工ふ化にも成功しています。前述した50年誌では黎明期にあたる時代、この伊豆の地では全国に先駆けて先進的な技術開発が進められていました。その後、昭和53年に県直営の栽培漁業センターが設立され、種苗生産に関する技術開発はそちらに移行しますが、伊豆分場では放流技術開発、放流効果の把握等に努めてきました。

本年3月に策定された静岡県第7次栽培漁業基本計画（期間：平成27年～33年）では、資源状態と業界からの強い要望からキンメダイが新たに研究対象種に採用され、当場で種苗生産研究を再開しました。昭和40年の人工ふ化成功以来半世紀たった今も種苗生産に成功した例は無く、この先多くの課題を解決する必要がありますが、精力的に取り組んで参ります。

（野田浩之）